

迷惑な客

登場人物

男1 (三十一歳)
男2 (三十歳) 男1の友人
女1 (三十一歳) 男2の恋人

あらすじ

東京。現在。

いつものファミレス。中華店の洗い場の男1と、戸籍がなく職もない男2がくだらない話をしている。ドリンクバーで3時間もこうしている。テーブルの上にはたぐさんの飲み終わったコップが並んでいる。二人共、あの町にゆかりがある。三十年前、地震のあったあの町に。

いつものファーストフード店。男1と男2、看護師で子持ちの男2の彼女・女1がポテトひとつを分け合っている。そしてまったくくだらない話をしている。女1は昔、教会の門の前に捨てられていたらしい。男1はすべての境遇を地震のせいだと思いたかった。

いつもの牛丼屋。どんぶりに紅しょうがを山盛りに乗せている。男2、女1が妊娠したと男1に告げる。だが戸籍がないので結婚はしないらしい。

いつものファミレス。役所に行ったが戸籍を取れなかった男2。男1は自分の知能が低い事で悩んでいる。

いつものファーストフード店。男1、別れた彼女への未練が止まらない。一方で女1は、腹の痛みを訴える。

いつもの牛丼店。女1が流産したらしい。それでも腹は減るのだった。

1場 ファミレス

食器を片付ける音がする。店員の「二名様ですね。お好きな席へどうぞ」の声。

テーブルの上にドリンクバーで飲み終わったコップがたくさん置いてある。丸めた紙ナプキンのごみがいくつも転がっている。

男1、男2、炭酸ジュースを飲みながら話している。

男1 食ってのはさ、色んな人のかかわりで出来てるわけよ。作る人だろ？ 運

ぶ人だろ？ 食べる人だろ？ 片付ける人だろ？

男2 うん。

男1 全部役割なわけよ。

男2 食べる人が一番得じゃね？

男1 え？

男2 俺なら食べる人を選ぶけど。

男1 金払う方だぞ？

男2 そうだけど、やっぱ食べる人でしょ。人間食ってなんぼなんだからさ。

男1 ああまあそうかもしれないけど。けど俺はさ、片付ける人でいたいわけよ。

男2 ふーん。

男1 いや別にそれでしか雇ってもらえなかったわけじゃないのよ。俺のこだわりつつうか、誇りがあるからさ。

男2 誇りは大事だわな。持ってる損はないわな。

男1 だろ？ 洗剤まみれで足びちよびちよだけど、けど大事だろそういうの。

男2 うん。まあ洗い場って大事だからな。ないと困るからな。

男1 だろ？ 俺の洗い方ひとつで、お客様が下痢するからな。

男2 責任重大じゃん。

男1 めっちゃ大事。ってか尊大。そこがたまんねえんだよなあ。

男2 けど大変そうじゃん町中華って。油すごくない？

男1 めっちゃすごいよ。最初は手荒れがひどかったもん。

男2 だろうな。

男1 けど結構慣れてきてさ、元カノがハンドケアっての？ そういうの教えてくれてさ。今はもう全然つるつるだよ。爪だってほら。

男1、爪を見せる。

男2 うわ、女子の手じゃん。何、それ磨いてんの？
男1 百均に売ってたんだよ爪磨くやつ。それでやった。
男2 マメな奴ー。爪までいる？
男1 けど汚いよりはよくね？
男2 そりゃ汚いよりはいいけどさ。何それはモテたくてやってるの？
男1 ケアだっつってんだよ。お手入れだよ。
男2 だからモテたくてやってんのかって。ってかそれ一番でしょ。
男1 違うよ。
男2 え、好きな子でもないの？
男1 いやいやいねえし。
男2 え、いんの？
男1 いやいないけどさ。
男2 うわ、いんの？
男1 いや別に好きってわけじゃねえし。
男2 え、いるんじゃない。
男1 いやいいなって思ってる子はいるけどさ。
男2 いるんじゃないんいるんじゃないんモテたいんじゃない。
男1 そんなんじゃないねえって。
男2 なんだよ隠すなよ。え、けどその毛むくじやはいいわけ？
男1 え？
男2 見せてもつかい。手。
男1 手？
男1、手を見せる。
男2 ほら、お前指毛すげえじゃん。
男1 すごかないだろ。ちよっとワイルドだけど。
男2 いや俺の見てみ。
男2、手を見せる。
男1 いや一緒ぐらいっしょ。
男2 いやいやけっこう立派だぞお前の。熊の手並みだぞ。
男1 言いすぎじゃね？

男2 熊だよ熊。ああ、けど知ってる？ 熊の手って結構美味いらしいぞ。

男1 食うかよそんなもん。

男2 いや食うんだってどっかの地方では。

男1 嘘つけ。熊をだぞ？

男2 熊をだよ。コーゲンたっぷりでブリブリらしい。

男1 パス。俺絶対パス。吐く。

男2 いや食ってから言えよ。

男1 お前食った事あんのかよ。

男2 ねえよ。あるわけねえじゃん。けど出されたら絶対食うぜ。

男1 ぜってえ食わねえって。

男2 食うつつってんだよ。

男1 いや見た目絶対グロいって。お前それだけで食う気失せるって。

男2 けど俺、お前の手は好きだぞけっこう。

男1 一緒にすんなよ。俺の手そこまでグロくねえわ。

男2 けどマジで食うって。

男1 しっけえな。お前はね、絶対、食わない。かけてもいいよ。命かけてもいいよ。

男2 強気じゃん。

男1 いったって強気だよ俺は。ってか強いんだよ俺は。

男2 どこがだよ。じゃんけんだって弱いしき。

男1 じゃんけん？ 勝手に決めんなよ。

男2 けど毛深い奴ってじゃんけん弱くね？

男1 そうか？ 関係ないだろ。

男2 じゃあ、ほら。(と手を出す)

男1 いいよ。

男1、男2、じゃんけんをする。男1、負ける。

男1 あ……。いやもっかい。

男1、男2、じゃんけんをする。男1、負ける。

男2 ほらな。

男1 いやお前俺のくせ知ってるからさ。

男2 いやいや俺のリサーチではね、毛深い奴は何かと弱いんだって。

男1 何かとってなんだよ。
男2 まずじゃんけんだろ？
男1 ーまあそれは認めるよ。
男2 でパチンコ、でスロット。
男1 ああそっちの話？
男2 いやマジでさ、指毛ボーボーの人リーチかかってもだいたい駄目だもんな。
男1 知らないけど。
男2 リーチはかかるんだよりーチは。けどあと一歩のところで逃しまくるんだよケブケブは。
男1 ケブケブ言うな。けどまあ俺パチンコやらねえから別にいいわ、毛深くても。風に吹かれるとふさふさ気持ちいいし。
男2 なんだよそれ。
男1 てかお前ずつと行ってんの、パチンコ。
男2 ずつとっていか週一な。
男1 競馬もやるんだろ？
男2 うん。
男1 で、強いわけ？
男2 いや、全然。
男1 じゃあそのセオリー成り立たないじゃないかよ。
男2 え？
男1 毛深い奴弱い説。
男2 いやいや毛深い奴弱いつて。
男1 だから、毛深くないお前が強いんだったら話は別だよ？ でも弱いんだろ？ お前も。
男2 うん。
男1 じゃあ毛深いの関係ないじゃん。
男2 え、そうはならないでしょ。
男1 なるっしょ。
男2 マジで？ けど体毛が薄い奴が負けるからって、毛深い奴が勝つってわけでもないからな。
男1 そうだけど、その時点で勝ち負けに毛は関係ないって結論出す方が正しいと思うけどな。
男2 正しいかどうかじゃねえんだよ。俺はさ、俺自身が導き出した答えが欲しいわけよ俺は。

男1　なんでだよ。
男2　ちよつと偉くなった気分つつうの？　味わいたくね？　発明して特許取ったみたいな。
男1　わかるけどな。けどそれならいつそのこと勝ちの法則見つければいいじゃん。
男2　勝ちの？
男1　パチンコとか競馬とかの勝ちの法則。
男2　ああ。それ簡単だよ。やんなきゃいい。
男1　そういう事じゃなくてさ。
男2　俺ね、別に負けてもいいんだよパチンコ。やってるのが楽しいだけだから。ジャラジャラジャラジャラ聞いてるだけで頭空っぽになるし。
男1　競馬は？
男2　競馬も。あれはロマンだからね。馬と人のストーリーつつうか、そういうのを楽しむもんだからね。
男1　じゃあ金懸けなくても良くね？
男2　まあ献金みたいなものと考えてくれよ。これからも走って下さいよお馬さんのな。
男1　エサ代か。
男2　そう。維持費つつうの？　お前風に言うと、俺、払う人。
男1　じゃあお前めっちゃ貢献してんじゃん。
男2　してるよ俺。パチンコ業界も競馬業界も、支えてんの俺だもん。
男1　いいように言うなよ。
男2　神様仏様俺様。みんな俺に手を合わせる。
男1　ハハハ、マジでやべえこいつ。
男2　ハハハ。あつ。
男1　何？
男2　あれ頼む奴いるんだ。
男1　どれ？

男1、男2、別の客に運ばれたポテトのアンチョビ風味を見る。

男2　あんまりじろじろ見んなよ。

男1　ああ。

男2　ポテトのアンチョビ風味ってやつだろ、新作の。

男1　ポテトなんか塩だけでいいよ。

男2 いいよな塩だけで。アンチョビの粉かかっただけで六百八十円もすんだぞ。高すぎっしょ。

男1 ってかき、ポテト食うなら他に美味しいところあるよな。大きい声じゃ言えないけどさ。

男2 いや言っちゃおうよ言っちゃおうよ。マ、ク、ド、

男1 (紙ナプキンを投げて) やめろ。そこそこ目立つ。

男2 ハハハ。

男1 あー、俺もう一杯いっところっかな。

男2 いっつけいっつけ。炭酸で腹パンパンにしとけ。

男1 あ、あれも飲んだ？ トニックウォーター。

男2 紅茶と混ぜて飲んだ。

男1 どうだった？

男2 まあ、ティーソーダになった。

男1 まんまじゃねえかよ。

男2 そりゃ紅茶とソーダだからな。けどマズくはなかったぞ。

男1 俺はいいやストレートで。

男2 マズいぞ、ストレートは。

男1 んな事ないっしょ。注いでこよっと。

男1、コップは持たずに立つ。

男2 お前コップあるじゃん。

男1 毎回言うなって。味が混じるだろ味が。ターコ。

男1、去る。男2、男1に向かって「殴るぞ」と言わんばかりに拳ポーズを見せてへへへと笑う。男1、しばらくしてトニックウォーターをなみなみに入れて戻ってくる。ストローを二本持っている。

男1 あのババア、超遅え。

男2 ん？ ああ。

男1 なあ、ストローあったぞ。

男2 え、どこに？

男1 水の上んところ。

男2 マジで？(受け取り) ありがとう。

男2、ストローの袋を破り、フツと吹いて飛ばす。
男1、ストローの袋を破り、フツと吹いて飛ばす。

男2 やめろよな。

男1 お前が先にやったんだろ。(とストローをジュースに刺し)あ、これプラだ。

男2 ん？

男1 プラのストロー。最近紙のストロー増えたよな。

男2 ああ確かに。

男1 俺あれ嫌いなんだよね。なんかスカスカしねえ？

男2 吸い方悪いんじゃないの？ 俺全然平気だよ？

男1 俺ちゃんと吸ってるよ？

男2 変わんないっしょそんなに。

男1 えー全然違うよ。紙で飲む炭酸全然うまくない。

男2 変わんねえって。

男1 変わりますって。お前口が鈍感なんだよ。

男2 なんだよそれ。

男1 唇が鈍感。

男2 んーやな感じ。水飲んだら全部こぼれていくんだろ？

男1 いや緩いんじゃないやなくて鈍感だっつってんの。

男2 どう違うんだよ。

男1 感覚が鈍いって事だよ。

男2 感覚？

男1 お前、キスしても何も感じないだろ。

男2 え？ 感じるの、お前。

男1 当り前じゃん。

男2 何感じるんだよ。

男1 相手の事。全部わかる気がする。

男2 怖っ。お前怖っ。

男1 その日の機嫌とか、体温とか、考えてる事とか、全部わかっちゃうんだよね。

男2 え、それって訊けば良くね？

男1 それを言っちゃあおしまいでしょ。

男2 ま、フラれた今となっては、訊く事さえ無理だわなあ。

男1 ……フラれてねえし。

男2 フラれてんじゃん。
男1 フラれてねえよ。

と男1、テーブルの下で男2の足を蹴る。

男2 痛えなあ。

男1 お前が悪いんだろ。

男2 けどさあ、なんでもわかるんだったらさ、なんでフラれたんだよお前。

男1 え？

男2 キスすりやわかるんだろ？ それでなんでフラれんだよ。

男1 ……だって、キスがなくなったからさ。

男2 ハハハ。意味ねえじゃん。お前はね、唇以外を敏感にしなさいな。唇はあとあと。

男1 でも俺は、言葉を超えた交流をするわけですよ、唇を通して。

男2 えーキモいんですけど。

男1 キスするからいいわけですよ。それで伝わるからますます愛おしくなるのですよ。

男2 ますますキモいんですけどー。

男1 フン、言ってなさいな。

男1、トニックウォーターを飲む。

男1 うわ、これ味しねえ。何これ。意味あんの。

男2 だからマズいって言ったじゃん。

男1 くそっ、満タン入れて来ちやつたじゃねえかよ。半分飲んで。

男2 やだよ。自分で飲めよ。

男1 プラスチックのストローだぞ？

男2 だからなんだよ。俺人が飲んだやつ飲めないタイプだからさ。

男1 ああもう……。

男1、仕方なく飲む。

男1 うあ、ゲップ出そう。ちょっと失礼。

男1、鞆を取り出し、中にゲップをする。

男2 びっくりしたあ。吐くのかと思った。
男1 ゲップゲップ。
男2 お上品なこと。鞆にゲップを出すなんて。
男1 俺育ちがいいもんで。
男2 どこがだよ。ドリンクバーひとつで三時間も居座る奴がさ。
男1 それに付き合ってるお前もお前だけだな。
男2 まあな。おかげで炭酸コンプリート出来たけどな。
男1 炭酸最高。
男2 炭酸最強。

男1、男2、「イエーイ」と手を合わせる。

男2 あ、そうだ。
男1 何？
男2 俺お前に金返さないと。
男1 あーそうだ忘れてた忘れてた。
男2 待って。財布。

男2、黄色い財布を出し二万円を取り出す。

男2 これ金運あがるんだってよ。黄色の財布。
男1 そうなの？
男2 百均で売ってたから間違いないっしょ。
男1 どういうあれ？
男2 ハハハ。じゃあ、これ、先月のお小遣い、助かりました。おかげでルミナリエを初体験いたしましたよ。
男1 (受け取り) どうでしたそれで。
男2 サングラス外すの忘れてたから本来の光ではなかったと思う。
男1 もったいな。わざわざ神戸まで行っというてき。
男2 だってLEDめっちゃ眩しいんだもん。
男1 それを見に行っただら？
男2 けど本来光ってのは直視するものじゃないんじゃねえの？ ぼんやり見てるくらいが一番きれいなんじゃないの？
男1 ルミナリエをぼんやり見る奴いる？

男2 俺俺。あと彼女。なんか走馬灯つつうの？ あれ見てる気分になったよ。

男1 走馬灯って死ぬ前に見るやつだろ普通。

男2 そうなの？

男1 そうだろ普通。

男2 まあいいじゃねえかよ。キレイはキレイだったし。けどなんか俺、外の人って感じしかなかったわ。

男1 外の人？

男2 あの町で生まれたとか言われてもき、ピンと来ないつつうかき。だから何みたいな。

男1 ああ。それは俺も経験あるよ。履き慣れない靴履かされてるような気持ち悪い感じ。

男2 お前も？

男1 だって東京で育っちゃったシティーボーイだからな。冬が来たって、そんな雰囲気にならないじゃないよ。NPOの連中が近付いてきて、そこで初めてあ、その季節かって。

男2 もうみんな忘れてるよな。つうか塗り替えられてるよな、東北に。

男1 そうそう、震災と言えば東北、みたいな。

男2 俺もそうとしか感じねえもん。そんな一昔前の震災押し付けられても困るつつうんだよな。三十年も前だぞ？ 炭酸だったら気が抜けてるよ。

男1 けどそういう文句言うと、なんか胸が痛むのなんで？

男2 知らね。

男1 え、お前もならない？

男2 なるけど。けど無視してる。

男1 なんで？

男2 だって俺、それより今日の方が大事だしき。どう生きるか毎日突き付けられてるわけだしき。そんな昔の事どうこう言ってもしよーがねえじゃん。

男1 そっか。まあそうだよな。

男2 ま、踏ん切りはついたよ。気が抜けた炭酸は俺は好んで飲まねえ。ルミノリエ見てそう思ったよ。

男1 おー、なんかかつけー。

男2 だろ？ 今を生きる、みたいな。それ以外必要ねえよ。けったるいだけだからな。

男1 だな。

男2 とにかく、それ返しとく。忘れないうちに。

男1 あんがとよ。けど早かったな、金作るの。仕事決まったの？
男2 いや、まだ。
男1 じゃあこの金は？
男2 ああそれ、彼女から借りた。
男1 はあ？ じゃあいらねえよ。
男2 なんでだよ。
男1 俺別に急いでないからさ。自分で払える時に返せよな。
男2 けどそれじゃあいつになるかわかんねえもん。最近ホストも黒服も身分証明してるって言うんだぜ？ けど俺免許もパスポートもマイナンバーももってないじゃん？
男1 うん。
男2 全然決まんないんだって仕事。すげえムカつく。だからまず、お前に返しとこうかなって。
男1 だからの意味がよくわかんねえんだけど。
男2 ほら、言っても他人じゃん、お前は。
男1 彼女だって他人じゃん。
男2 いや、でも彼女は、ほら、将来を約束した人だからさ。
男1 けどどうやって結婚すんだよ。戸籍もないのにさ。
男2 誰が結婚するって言ったよ。出来もしないもの追っかけるほど俺頭悪くねえわ。
男1 じゃあどうすんだよ、約束なんかして。
男2 どうもしねえよ。ただ一緒にいるってだけじゃん。そもそもさあ、結婚なんて儀式が不自然なんだよなあ。いらねえいらねえそんなもん。俺たちは結婚よりも強い絆で結ばれてるからな。
男1 出た、絆。
男2 なんだよ。
男1 絆、絆、絆、絆。
男2 連呼すんな。嘘くさく聞こえる。俺はねえ、一緒に暮らせて年をとれる将来があれば、それでいいんだよ。
男1 かつこいいじゃねえかよ。
男2 だろ？ 俺にはさ、戸籍は無くても強いメンタルがあるからさ。毛深い奴とは違うんだよ。
男1 え、またその話に戻る？
男2 え？
男1 毛深い奴弱い説。

男2 まあ証明されたんじゃね？ 今のでき。俺は強い。お前と違って。
男1 俺は別に弱くねえよ。
男2 いやいや。元カノんちの周りまだうろついてるくせに。
男1 してねえよ。
男2 してんじゃん。
男1 してねえよ。
男2 嘘つけ。
男1 してねえって言ってんじゃん！
男2 デカい声出すなよ。
男1 してねえって言ってんのによ。
男2 けどスマホの待ち受け、まだ彼女の横顔じゃん。
男1 ムカつく。見てんじゃねえよ。
男2 洗い場の子にしとけて。せつかく恋しかけてんだからさ。
男1 いやいいなと思ってるだけだよ。
男2 だからいいなと思ってるんだろ？
男1 いやいいなっつうかさ、横顔がさ、彼女に似てんだよ、その子。
男2 え？ えー。引くわー。そういう事なの？
男1 そういう事なの。なあ、俺やっぱまだ彼女の事好きだよな。
男2 そうなんじゃないの。ってかそれしかないっしょ。
男1 あー恋するってつれーわ。フラれるってもっとなつれーわ。
男2 ま、癒してくださいよその二万円で。
男1 ああ、そうするしかねえか。
男2 もらっとなつれーわ。
男1 もらっとなつて元は俺の金だよ。
男2 硬い事言うなって。一番親しい他人じゃないの。
男1 知ってる？ それを親友と呼ぶんだぜ？
男2 うわ、暑苦しっ。

暗転。

2場 ファーストフード店

ポテトが揚がった合図のメロディが鳴る。
テーブルの上にはポテトが一つ。

男2、女1が食べながら話している。女1、ペットボトルのコーラを取り出して飲み、鞆にしまう。

男1、指の毛を抜き紙ナプキンの上に並べている。

男2 ここで抜くなって。

女1 こっち飛んでくるじゃん。

男1 大丈夫だよ。毛根が紙ナプキンをつかんで離さないから。

女1 気色悪っ。

男2 そうだそれでね、聞いて。

男1 何？

男2 俺ね、決めたんだよ。いや俺たちか。

女1 うん。

男1 何を？

男2 俺、主夫になる。

男1 え？

男2 専業主夫つつうの？

男1 つうのって言われても。(女1に) え、いいのそれで。

女1 私が働いて稼いでくるから、この人に家の事全般やってもらうんだあ。

男1 仕事探し諦めたの？

男2 銀行口座ももてない男がまともな職に就こうなんて百年早いんだよ。給料もらう方法がねえんだもん。だからさ、本腰入れて、玉の輿に乗ろうと思っとき。

男1 逆玉な。え、でもそれでやっていけんの？

男2 なんとかなるっしょ。

女1 てか看護師なめんなよ。

男1 けどパートじゃんお前。

女1 しょーがないじゃん。子供いんだからさ。

男1 だから余計に大丈夫なのって。

男2 お前が心配するようなことじゃねえよ。みっちゃんとも上手く行きはじめてるし。何とかやりくりしていくつつうんだよ。

女1 この間さ、みっちゃんが、パパって言いかけたよね。

男2 そう。パ……って。恥ずかしそうにして。めっちゃん可愛かった。

女1 三歳になってから人見知りし始めたんだよね。なのにパ……って。

男1 へえ。お前信用され始めてんじゃん。

男2 そうみたい。

女1 　　いなくちやダメな人っているんだよね、この世の中にはさ。

男1 　　それがこいつだっけ言うの？

女1 　　当り前じゃん。ねー。

男2 　　ねー。

男1 　　うぎ。

女1 　　だから、私が養うって決めたんです。

男1 　　ふーん。

女1 　　あ、けどうちお小遣い制だし、闇バイト禁止だからさ、この人高い店に誘わないでね。この人どこにでもあんたの行くところについて行っちゃうからさ。

男1 　　高い店行くと思うか？

女1 　　ま、ないか。

男2 　　ないない。

男1 　　ちなみにだけど、もしもさ、もしも安いキャバクラとかあったら行ってもいい？

女1 　　いいわけではないでしょ。いくらすると思ってるの。

男1 　　いやもしも、安いところがあったら。

女1 　　あのさ、別に女の子と遊ぶのは構わないわけよ私は。ただし金がかかるなら別だっつってんの。風俗だろうがピンサロだろうがキャバクラだろうが、金がかかれないところがあるなら行ってこいつつうんだよ。

男1 　　すげえなお前。なんかすげえわ。

女1 　　金はあるだけしかないんだからさ。それに、金のかかない女がいたら連れてこいつつうんだよ。逆に恵んでやるよ。

男1 　　うわー強気ー。

男2 　　ちなみに体毛薄めです。

女1 　　言わんでええわ。

三人、ポテトに同時に手を伸ばす。

三人 　　お。

男1 　　どうぞどうぞ。

男2 　　いやどうぞどうぞ。

女1 　　どうぞどうぞどうぞ。

男2 　　じゃあ、お先に一本。

男2、ポテトをつまむ。

男2 おー、くたくたになってる。

男1 お前しんなり派？

男2 俺しんなり派。お前カリッと派だろ？

男1 俺カリッと派。

女1 私もカリッと派。

男2 油回ったのうまいぞー。

女1 体に悪そうじゃん。

男2 一緒だろ、油の量変わんないんだから。中まで染み渡ってんのがたまんねえんだよ。

女1 けどほら言うじゃん。酸化するとかしないとか。

男1 何それ。

女1 油も古くなると良くないらしいよっていう。なんか空気に触れると良くないらしい。

男1 空気に触れずにどうやって存在すんだよ。この世は空気で出来てんだぞ。

女1 知らねえよ。まあでもなんでも古くなるっていう、それだけの事なんじゃないの？

男1 ああ。

女1 一応さ、心配してやってんじゃん体の事。

男2 カリッとしたの食った方が体にいいって？

女1 わかんないけどさ。

男2 一緒だよどっち食っても。てか体の事心配するなら、ポテト食わないって手もあると思うけどな。

男1 それを言っちゃあおしまいなんだって。だって他に何かあるよ？

男2 レタスなんかとかとか。

男1 レタスなんて食っても食わなくても同じじゃん。

男2 そんな事ないだろ。食物繊維があるとかテレビで言ってるじゃん。

女1 超少ないらしいけどね。

男2 何が？

女1 食物繊維。レタス一個分って言ったって、大したことないって言うよね。

男1 言う言う。それに腹も膨らまねえ。この世に生まれてきたレタスさんには申し訳ないけどさ、食う価値なしだな。

男2 えーけど俺好きだけだな、レタス。

男1 どこがいいんだよ。

男2 歯ざわりじゃん。決まってんじゃない。あのシャキシヤキ感たまんねえ。

男1 シャキシヤキ？

男2 そう。シャキシヤキ。

男1 なんかそういうのが気に入らねえんだよな。

男2 そうなのって？

男1 シャキシヤキしか表現がない所。

女1 他に何があんだよ。ジヨキジヨキとか？

男1 いやオノマトベじゃなくて。

男2 オノマトベってなんだよ。

男1 え、お前知らねえの？

男2 知らねえよ。俺学校行った事ないもん。

男1 ああ、無学だもんな。

男2 うん。ピッカピカの無学。

男1 あのな、オノマトベってのはな、シャキシヤキとかジャキジャキとかかなんか音っぽいのあるじゃん。

男2 うん。

男1 そうなのを言うんだよ。

男2 じゃあパキパキもか。

男1 そう。パキパキもバキバキも。そういうの無しで表現してくれつつうの。

女1 ムリじゃね？ レタスはレタスとしか言いようがなくね？

男2 うん。ないな。他に言うなら、そうだな、レタスはキク科の植物って事ぐらいだな。

男1 え、何それ。

女1 お前なんで急に知識出してきた。

女1、スマホで検索する。

男2 全然信じてねえじゃん。

女1 キクってあの菊？

男2 そうだよ。

女1 うわ、合ってる。

男1 知識半端ねえ。天才じゃねえの？

男2 知ってる事言っただけじゃん。俺ね、なんかいっぱい刷り込まれてるらしいんだわ。

男1 刷り込まれてるって？

男2 知識つつうの？ 学校行ってなかった代わりにさ、母ちゃんがいろんな話してくれてさ。学問とは違うけどさ、勉強になんだよな。

女1 結構物知りだよな。

男1 そうそう。ただ偏りは気になるけどな。

男2 それは仕方ないじゃん。つまんねえ話は受け流してたからさ。それに、母ちゃんの話、どこまで本当かわかんないんだよね。いや嘘ついてるわけじゃないんだよ。ただ母ちゃんも学がねえからさ。だから俺の持つてる知識、全部ガセって可能性もあるんだよな。

男1 まあ、ガセでもいいけどな。面白ければ。

女1 うん、正しいより面白いしね。

男2 まあな。

男1 あ、ホヤの話聞いた？

女1 ホヤ？ 貝のホヤ？ 知らない。

男1 あれね、人間とあんま変わらないんだって。

女1 ホヤが？

男1 そう。あれ人間と大して変わらないんだって。だよな？

男2 多分ね。母ちゃん曰く。

女1 けど全然違うじゃん。

男1 けど似てんだよな。

男2 近いらしいよ。

女1 何が？

男2 距離が。

女1 距離？

男2 生物としての距離。

女1 なんだそれ。チンパンジーとかの方が近いでしょ。

男2 けどホヤだって生きてるしさ。

女1 それ言ったら生き物って生きてる事前提なんだから、みんな同じじゃね？

男2 同じだよ？

女1 だよって。

男2 生き物なんてそんな変わんないって。ホヤだろうがチンパンジーだろうが人間だろうが。俺はね、その壁を取っ払いましょって言いたいわけよ。

女1 その壁？

男2 だから、分け分けしたがるじゃん。俺人間、お前ホヤ、みたいな。

女1 そりゃするでしよ。

男2 けど口があって肛門があってなんか食って生きてんだぜ？ 口から入れたもん消化して肛門から出して生きてんだぜ。

男1 ポテトがまずくなる話？

男2 そう、ポテトがまずくなる話。けどそれが真実だからさ。受け入れておくれよ。

男1 けどさ、お前が言うみたいに大して変わんねえなと思う事もあるよ。そう思いたいってどうかさ。

女1 例えば？

男1 うちのトイプーのモンちゃん、犬だけど、言葉もわかるし感情もあるし、人間と大して変わんねえと思う事があんだよね。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、ちよこつと人間よりは素直なだけでさ。俺さあ、初めて犬飼ってさ、こんな可愛いと思わなくてさあ。いやあ、モンちゃんと俺は運命の出会いをしたんだなってつくづく思うよ。

男1、靴を脱ぎ、椅子の上に足を上げて座る。

男2 でもお前が犬飼うなんて思わなかったよ。

女1 フラれたばっかで勢いで買ったの？

男1 違うわい。家の前に捨ててあったんじゃない。

女1 トイプーが？

男1 そうトイプーが。洗濯籠に入れられて、上からラップがかかって。仕方ないからうちで飼う事にしたんだよ。親父が優しい目で、しょうがねえなああって。

女1 何でモンちゃんにしたの、名前。

男1 門の前に捨てられてたから、名前はモンちゃん。

女1 へえ。

男2 くせつ。なんか臭くね？

男1 え？

男2 あ、お前靴脱ぐなよ。

男1 いいじゃん。

男2 くせえってマジで。

男1 そんなに匂う？

男1、足の匂いを嗅ぐ。

男1 あ、マジ。こすい匂いする。
女1 こすいって意味違うね？
男1 ちよっとすっぱいって意味じゃねえの？
男2 違うだろ。いいから足下ろせって。
男1 わかったよ。

男1、足を下ろす。

男2 (女1に) けどお前と境遇似てるよな。
女1 私足臭くねえわ。
男2 そこじゃなくてさ。門の前に捨てられてたってとこ。
女1 ああそこね。さっき私も思った。私と境遇似てるなって、モンちゃん。
男1 え、お前門の前だったっけ。
女1 そう、教会の門の前。ラップはかけられてなかったけど、毛布がかかってたって。ほら一月だったし、雪降ってたし。
男1 へえ。
女1 そっか。モンちゃんも門の前に捨てられてたのか。え、モンちゃんに会いたい。シンパシーしかない。
男1 まあいいよ。今度俺んち遊びに来いよ。
女1 やった。何歳？
男1 推定十二歳。結構おばあちゃん。
女1 私も推定。気が合いそう。
男2 推定って何が？
女1 年齢。私の。
男2 年齢は確かでしょ。
女1 けど誕生日わかんないじゃん。震災前後に生まれたって事ぐらいしかさ。推定でつけられた誕生日だからさ、私何時までも推定で生きてんだよ。多分、今、私大人。
男1 見りゃわかるよ。
女1 いやわかんないよお？ 明日にならないと大人になんないかもしれないよお？
男2 ないない。タバコ吸ってるくせに。
女1 悪ガキは吸うよ？
男2 酒だつてがぶがぶ飲むし。

女1 悪ガキは飲むよ？ がぶがぶ飲むよ？

男1 飲んでたんだろ、そうやって。

女1 飲んでねえよ。金も自由もなかったし。私はいたってフツーの子供でした。

男1 でしたって言っちゃってんじゃない。大人じゃん。

女1 バレた？

女1、ペットボトルのコーラを出して飲む。

女1 ……ってか、ずっと大人だったよ私は。子供ってさ、みんなそうなんじゃないの？

男1 かもな。そうかもしれねえな。

男2 フン、くだらねえ。人間に大人も子供もあるかつつうんだよ。今の自分がいる。それだけで精一杯だよ。

男1 まあな。

女1 くだらないと言えば、

男2 ん？

女1、立ち上がる。

女1 トイレ行ってくる。下ってきた。

男2 おい、やめろよ。

女1 いいじゃん今更。将来を約束した者同士、何を隠す必要がある。

男2 そうだけどきあ。

女1 あ、でも勘違いのない様に言っておきます。下ると言っても大きい方ではありません。小さい方です。誤解を生むような言い方をして、大変申し訳ありませんでした。では、ジョーっつと行ってきます。

男1 よ、男前！

男2 うるさいよ。

女1、トイレへ行く。

男1、また指の毛を抜く。

男2 ここで抜くなって。

男1 俺強くなんだよ。

男2 ならねえよそんな事で。
男1 あ、セオリーぶっ潰す気？ ああ、目と指が疲れる。
男2 だからやめとけて。
男1 俺もトイレ行こつかな。行つていい？
男2 ヤダ。一人にしないで。
男1 言い方。
男2 淋しいと俺腹が減るんだよ。
男1 じゃ、もう少し抜いてやる。
男2 そうして。そつとそうして。

男2、ポテトを全部食べる。

男1 あー指毛しつけー。
男2 ポテト全部食っちゃったよ。
男1 もう一個頼む？
男2 いらね。勿体ねえ。結構カロリー取れたし。ガソリン満タンの感じ。
男1 マソリンガンタン。
男2 ガソリン満タン。
男1 マソリンガンタン。
男2 ガソリンマンタ、あ違う、マソリンガ、あ、いや合ってる。
男1 マソリン。

と男2、空になったポテトの箱を投げる。

男2 お前余計な事言うなよな。どつちかわかんなくなんだろうーが。
男1 ハハハ。単純な頭してんなお前。
男2 お、侮辱か？ 無学への侮辱か？
男1 無学盾にするのやめろよな。俺の倍、頭いくせにさ。
男2 倍じゃねえよ。数万倍だよ。俺お前とは違って、時間さえあれば数いつまでも数え続けられるからな。
男1 だいたい人間はそうなんだよ。俺以外の人間はな。
男2 数字読めねえのは痛いわな。
男1 痛い痛い。オノマトペ知らないくらい痛い。
男2 俺は知ってんだよオノマトペ。オノマトペの意味を知らなかっただけだし、今もう知っちゃってるし。

男1 そうだよなあ。お前学習すんだよなあ。俺と違って。
男2 まあ生まれ持ったもんだからしよーがねえよ。
男1 生まれ持ったものじゃねえよ。生まれてすぐ保育器からポーンってなつて、ドーンって頭ぶつけたからこうなっただよ。
男2 あ、そっかそっか。そう言ってたな。じゃあ後天的な頭の悪きなわけだ。
男1 そう。それまでは俺、お前より頭良かったかもしれない。
男2 かもな。それはかもな。今は現実違うからな。
男1 わかってるよ。けど俺中卒だし。学歴ないよりいいし。
男2 お、それ言う？
男1 言うよ。中卒だから。
男2 たかが中卒じゃん。
男1 されど中卒だよ。
男2 ホヤと変わんねえよ中卒じゃあ。
男1 ホヤ以下だよ無学は
男2 ホヤと同等だよ無学は。
男1 ホヤより上だよ中卒は。
男2 なんだホヤ野郎。
男1 やるかホヤ野郎。
男2 うるせえよ。
男1 お前こそうるせえよ。

男1、男2、見つめ合う。

男2 なんだこれ。目くそ鼻くその言い合いじゃねえか。
男1 ほんとだな。くだらねえな。
男2 やめとこやめとこ。
男1 けどさあ、俺思うんだけどさ。
男2 何？
男1 ホヤと人間は近いんだろ？
男2 うん。多分な。
男1 なのに人間同士ってなんでこうも違うんだよ。
男2 知らね。
男1 生まれてくる場所とか、生まれ持った才能とか、ついてるチンチンとかで全然違ってくるじゃん。
男2 うん。

男1 なんてだろうな。

男2 そりゃ、生まれてくる場所とか、持って生まれた才能とか、ついても
んが違うから違うんじゃない？

男1 そうなのかな。それだけなのかな。

男2 そうなんじゃない。だからあいつトイレ長いんじゃない？

男1 ああ。女って長いよな。

男2 生まれつき長いんだよ。飲む量変わんないのに長いんだよなあいつ。

男1 あれ出る量多い人って損だよな。百二十円のコーラまんま出ちゃうんだ
からさ。

男2 だよなあ。俺ら吸収してんのかなちゃんと。

男1 してんじゃね？ カフェインとかスパイスとか全部。

男2 うわー。あいつがかわいそうになってきた。せっかく働いてんのにさ。
全部おしっこになるんだぜ？

男1 そんなもんだよ人生は。うん、そんなもんですよ。

男2 お、人生語りますか。

男1 語るねえ。だって俺語り部だから。

男2 語り部。胡散臭っ。

男1 けど大事なんだからな語り部。

男2 伝言ゲームと変わんねえんだから、そんなの嘘くせえって。

男1 お前誰かに怒られるよ。戦争とか災害とかの語り部やってる人にピンタ
されろよ。

男2 お前さあ、NPOに利用されてるだけなんじゃないやねえの？

男1 必要とされてんだよ。だから俺は語り続けてんだよ。お前だってさ、興
味があるから来たんだろ？ あのNPOにさ。

男2 そうだけどき。けど俺には語る事なんてなかったからよ、居場所にはな
らなかつたんだよ。

男1 それで飛び出していったんだ。

男2 フン、語り部の何がいいんだよ。

男1 人生知れるじゃん。色んな人の人生。それに俺のも知ってもらえるし。

男2 知る事に重きを置きすぎじゃないのか？

男1 大事だよ知るって。

男2 俺はそうは思わない。知らない事の方が大事だよ。

男1 無学者の言い訳だ。

男2 無学今関係ないだろ！

男1 ……

男2 あ、ちょっと本気出しちゃった。

男1 ……。

男2 ……知る事に意味なんかねえんだよ。なんで俺に戸籍がないのかとか、あいつがなんで捨てられたのかとか、お前がなんで数字読めないのかとか、そんなの現象でしかないんだからさ。ただ俯瞰で見たりやいいんだよ。

男1 ……。

男2 ぼーっととき、ただ景色見るみたいに。

男1 ……。

男2 なんてことない景色じゃねえかよ。

男1 全部地震のせいだ。全部。

男2 違うよ。

男1 そうだよ。つか、そういう事にしといてくれよ。

男2 ……まあ、いいけどさ。

女1、戻ってくる。

女1 あれ。またいつもの話になってる？

男2 なってる。

女1 またかよ。いじけモード好きだねとことん。はい。もう終わり終わり。色んな事が起きて私たちは出会った。何一つ欠けても出会うことはなかった。地震も、NPOも、東京も。出会うべくして出会ったんだよ。これは喜びなんだからさ。

男2 だよな。

女1 そうだよ。

男1 だよな。

女1 でなきゃポテトがまずくなる。

女1、テーブルの上を見て、

女1 あ、ないじゃんポテト！

暗転。

3場 牛井屋

男1と男2が牛井を食べようとしている。紅しやうがを山盛りに乗せていく。

男1 盛りすぎつしよ。テロだと思われねえ？

男2 食えばいいんだよ食えば。

さらに紅しやうがをのせていく。

男1 なんでみんな黙って食ってんの？

男2 お一人様だからでしょうが。

男1 ああ。おひとり様か。淋しいな、友達いないやつつき。

男1、男2、周りを見る。

男1 わ、めっちゃ睨まれてるし。

男2 見んな見んな、気にすんな。俺らだっけかっけはそうだったからよ。

男1 誰に言ってるんだよ。

男2 ここに集いし民に。へへへ。なあ、俺たちの話、ここにいる全員に盗み聞きされると思うとゾクゾクすんな。

男1 なんだだよ。

男2 あ、じゃあここで重大発表します。

男1 どうせしょーもない事だろ。

男2 聞いてますか皆さん、聞いてますか？

男1 やめろよ。

男2 なななんと、あいつが妊娠いたしました！。

男1 え？

男2 パチパチパチ。イエーイ！

まばらに手を叩く音。

男2 ありがとうそのお兄さん。あなたにも祝福を。

男1 え、マジで言ってるの？

男2 嘘で言うわけないじゃん。いやあ、安定期に入ってからと思ったんだけど

ど、嬉しすぎて言っちゃったよ。

男1 え、マジで？

男2 マジマジ。俺、二児の父。

男1 え、マジ？

男2 マジと書いて本気と読むんだぜ？

男1 逆だけどな。

男2 え？

男1 いやいい。

男2 けどさ、産婦人科ってマジ緊張したわ。俺そもそも病院行かねえじゃん、保険証ないからさ。

男1 うん。

男2 病院ってだけでも慣れてねえのに、女子の巣窟にお邪魔するって、マジ勇氣いったわ。

男1 けどちゃんと付いて行ったんだ。

男2 そりゃ行くに決まってんじゃん。俺の子供だぞ。

男1 まあそうだな。けど、マジでどうするんだよお前。

男2 どうするって、俺は産まないよ？ へへへ。

男1 わかってんだよそんな事。

男2 おめでどうは？

男1 え？

男2 おめでどうが先っしょ。

男1 ああ……そうだよな。とりあえず、おめでどう。

男2 とりあえずは取り消してよ。

男1 ああそっか。おめでどう。

男2 ありがとう。で、名前なんだけども、まだ男か女かわかんないからさ、どっちも考えてるわけよ。っていうかどっちでもいける名前もいいなとか思っけ。ほら、将来子供がオカマかオナベになったとしてもそれなら困りにくいかなってさ。

男1 そんな事心配してんのか？

男2 するよするよ。だって俺、父親だぞ？

男1 ちちおや。

男2 おやちち。

男1 ちちおや。

男2 おやちち。

男1 おやし。

男2 じじおや。うわやっぱ。なんて呼ばせよう。
男1 え、みっちゃんはパパって言うんだろ？
男2 パ……な。あけど、男だったらやっぱ親父って呼ばせよっかな。その方が俺がかっこよく見えるし。あ、でも三才の子供に言われたらちよっとショックかも。
男1 面白いけどな。
男2 面白いけど俺ギクツてなるかも。え、何言った、みたいな。
男1 親父、牛乳ちよーだい。
男2 うわ、渋いなその三才。けど可愛いな。
男1 親父、抱っこ。ねえ抱っこ親父い。
男2 なぜだろう、やらしく聞こえる。
男1 お前の子供だっつうの。
男2 俺のかあ。
男1 そう、お前のだ。
男2 うわあ、俺のだあ。
男1 と、証明は出来ないけどな。
男2 え？
男1 出来ないじゃん。
男2 いやいや俺しかいないっしょ。何言いだすんだよ。俺しかないに決まってるでしょうが。
男1 わかんねえよ？
男2 いや、あいつはそんな女じゃありません。結婚より強いもので結ばれてんだから俺たちは。
男1 それよく言うけどさ、お前ら結ぶ強いものってなんなわけ結局。
男2 口約束。
男1 口約束？ 一番弱いやつじゃねえか。
男2 そんな事ないよ。俺口硬いよ。
男1 意味違うけど全然。あのさ、口約束なんて見えねえもの信じるなんて、心霊現象信じるのと同じなんだって。
男2 え、でもいるよ？ 幽霊。
男1 いやいないよ。
男2 いるって。
男1 いたら大変じゃん。今まで何億年の間に何億人が死んだと思ってんだよ。
男2 そんなのいたらウジャウジャするじゃん。
男1 ウジャウジャしてんだって。

男1 いや詰めっ詰めになるって。
男2 詰めっ詰めしてんだって。お前見えてないだけなんだよ。
男1 地球パンクするじゃん。
男2 もうしてるよ？ え、知らないの？ だから人は宇宙に行こうとしてる
男1 じゃん。
男1 それは違うでしょ。
男2 いやいや、見える人からするとね、苦しいんだよ地球って。積み積みも
男1 つた命の山でしかないんだから。
男1 命の山？
男2 そう。この積み積みもった紅しようがのようにな。
男1 ああ。
男2 と同時に、命の海でもある。波に揺られてぶかぶかしてるよ今日も。た
男1 くさんの命がさ。
男1 そうなんだあ。
男2 ま、俺は見えないけどね。
男1 え、見えないの？
男2 見えないよ？ けど信じてるから。でも全然見えない。
男1 なんだよそれ。
男2 見えるか見えないかで物事判断しちゃダメでしょ。そしたら腹の中のま
男1 だ見ぬ子供の存在否定することになっちゃうっしょ。
男2 そうだけどさあ。てか、牛丼早く食えって感じだよなあ。
男2 多分みんなそう思ってるよね。
男1 うん。
男2 いやいや、汁が染み染みになるのを待っておるのですよ。
男1 膨らんだお米で腹いっぱいにするのですよ。
男2 納得かなあ？（と尋ねるように耳に手を当てる）
男1 あるあるですと。お優しい。
男2 ここに集いし民たちは腹が減るとはなんぞやと、ちゃんと知っておるの
男1 ですよ。
男1 それはありがたい事だなあ、ワトソン君。
男2 誰がお前の助手だよ。
男1 済まぬ。
男2 あー、けどなあ、戸籍がなあ。
男1 ああ、やっぱりそこに行きあたる？
男2 結婚は出来ないし、彼女の婚外子みたいな扱いにしかならねえんじやな

男1　いの？　よくわかんねえけど。
男1　ああ、法律的に？
男2　そう、法律的に。えーだよ。誰が作ってんだよこの法律って感じだよ。
男1　紙切れ一枚ないところも生き辛えものなの？
男1　そういうのってき、なんか弁護士とかにお願いすれば何とかなるんじゃないの？
男2　弁護士？　金どうすんだよ。
男1　ああ。
男2　紅シヨウガと膨らんだ米食ってる奴がき、何言ってるんだって感じでしようよ。
男1　まあな。じゃあ役所とかに行って相談してみれば？
男2　役所かあ。怖いな。
男1　なんでよ。
男2　そこでダメだったらもうないじゃん。最後の砦じゃん、役所って。
男1　けど行ってみって。なんか進展あるかもしれないねーし。
男2　そうだよなあ。今度行ってみようかな。彼女が休みん時にでも。
男1　まあ説明難しいけどな。
男2　そうなんだよなあ。父親わかんないしなあ。俺を俺だどう証明するよ。
男1　んー手相見せるとか？
男2　は？
男1　お前神秘十字入ってんじゃない。先祖様に守られてるって言うぞ？
男2　だからなんだよ。
男1　先祖がいた、お前がいる、証明になる。
男2　ならねえよそんなので。
男1　けどおんなじ手相、二つとないって言うしき。
男2　指紋取られるみたいじゃん。
男1　うわ、犯罪者みたいだな。やめとけやめとけ。
男2　お前が言い出したんじゃない。
男1　じゃあさ、お涙ちようだい作戦で行けよ。
男2　どうやって？
男1　犯されたんです。震災の時に母ちゃんが犯され――
男2　（襟元をぐっと掴む）お前、それ言うなよな。
男1　う、ごめん。放して。
男2　（手を放す）
男1　けど地震が悪いんだからさ、お前のせいじゃないんだからさ。

男2 俺のせいとは思ってねえよ。ただ本当の事説明したら、母ちゃん傷つけるだけだろ。ってか、俺もそれ以上何も知らねえ。知りたくもねえわ。戸籍がないのだったよお、母ちゃんが無責任みたいに聞こえんじやねえかよ。

男1 そうだよな。

男2 あーやっぱ戸籍とか嫌になってきた。

男1 なあゴメンってほんとに。

男2 数字ひとつ読めなくせによ。一人でお会計も出来ないくせによ。

男1 あ、それ言う？

男2 ……クソが。

男1 しょーがないだろ。お前連れてこなきゃ金払にくいんだからさ。別に好きでお前とつるんでるわけじゃねえんだよ。

男2 それ本気か？

男1 本気中の本気だよ。

男2 それは良かった。俺も好きでつるんでるわけじゃねーし。NPOにくつつけられたただ唯一の友達つうか、そんなだから付き合ってるだけだしよ。失くしたら勿体ねえもんな。

男1 唯一の友達ねえ。へへ。嬉しい事言ってくれるじゃん。だから好きなんだよお前の事。

男2 キモいんだよ。

男1 いやマジで好き。やっぱ好きでつるんでんだわ俺。さっきの取り消すわやっぱ。

男2 ……じゃあやっぱ俺も撤回する。してやる。俺もお前好きだもんな。

男1 キモ。けどまあいいか。

男2 おっ、そろそろつゆだくしてくてるんじやない？

男1 おおー吸ってる吸ってる。じゃあ、彼女の妊娠を祝して、いただきますか。

男1 だな。

男1・男2 (手を合わせて) いただきます。

と、男2、立ち上がり、

男2 えっ、卵くれんの？ ありがとうお兄さん！

暗転。

4場 ファミレス

テーブルの上に飲み終えたコップが並んでいる。男1、コップの底についた水滴で五輪を作っている。

男2、コーヒーを運んでくる。

男1 お、コーヒー？

男2 大人の飲み物ですよ？

男1 腹膨らまねえじゃん。

男2 箸休めですよ箸休め。

男1 でまた炭酸に戻るんだろ。

男2 そういう事。てかお前何やってんの？

男1 五輪作ってんの。

男2 は？

男1 コップの跡で五輪マーク。

男2 びちょびちょじゃねえかよ。拭けよ。

男1 やだよ。

男2、手でぐちゃぐちゃっと拭く。

男1 あーやめろよな。平和の祭典だぞ五輪は。

男2 知らねーよ。(と飲み) うわ、苦。カフェオレにすればよかった。

男1 それ何？

男2 イタリアンローストだって。

男1 渋いのいったね。

男2 イタリア人こんな苦いの本当に飲むのかよ。

男1 エスプレッソとか苦いじゃん。

男2 ああそつか。渋いな、イタリア人。

男1 外国の人つてき、見た目も渋いよな。同い年でもさ、年上に見えねえ？
男2 でも中身は一緒でしょ。俺らみたいな三十代もいるって。

男1 いるかあ？

男2 いるいる。日本には来ないだけでさ。

男1 そうか？

男2 だってパスポートも取れないだろ、俺みたいなのだとさ。
男1 ああ。

男2 車の免許も保険証もない。スマホは彼女名義。どの国でもそんな奴はドリンクバーで食っちゃべって暇つぶしてらるって。

男1 ドリンクバーって海外でもあんのかな。

男2 あるっしょ。知らねえけど。けどなんか安いもので腹膨らませてらるって。で無駄にぶくぶく太ったりしてらるって。

男1 ああいるな。低所得者のデブい奴。

男2 だろ？ だいたい安いものはカロリー高いからな。それは全世界共通でしよ。

男1 全世界とは、大きく出たねえ。

男2 アフリカは知らねえけど。

男1 アフリカはないな。アフリカは金持ちが太ってるし。

男2 あああるなそのイメージ。

男1 で子供はみんなガリガリ。

男2 うわー。何とかってところに寄付したくなるわ俺。

男1 してやれしてやれ。百円でも向こうなら何倍もの価値あるよ多分。

男2 いや、俺もね、リアルに人の親になるわけだからさ。放っておけないわけですよ何かと。

男1 わかるよわかる。

男2 子供はみんなスクスクしててほしいわけですよ。

男1 うんうん。

男2 みっちゃんも、まだ見ぬ子も、ぬくぬくしてほしいわけですよ。このコーヒーみたいにき。(と飲む) いやあ、コーヒーが美味しい。苦いけど。

男1 で、あれどうなったの？ 行ったの役所。

男2 行った行った。けどそれがさあ、聞いてくれよワトソン君。

男1 いつから俺お前の助手になったんだよ。

男2 いやいいから聞いてくれよ。

男1 まあいいけどさ。

男2 窓口のやつがさ、証明できるもの持ってこいっつうんだよ。

男1 証明？ なんの？

男2 俺が生まれたって証明。

男1 は？

男2 は？ だろ？ ないっつうてんのにき。だから来たんだっつうのにき。

写真とかでもなんでもいいからとか言って。だからないっつうてんのに

さ。まったく話になんねえんだよ。で、拳句の果てに裁判所がどうか
難しい話始めてさ、俺もう頭に来てさ、俺ここにいんだろうがつつて。

男1 そりゃ怒るわな。

男2 いや思っただけだけだな。

男1 怒れよ。

男2 だって緊張してたしさ、俺。けどそしたら代わりに彼女がブチ切れてく
れてさ。

男1 あいつが？

男2 あいつって言うなよ。

男1 あ、ごめん。

男2 けどあいつ、なんの為の役所だよ！ とか言ってブチ切れてさ。机バン！
とかしてさ。(机をバンと叩き)「テメエの仕事だろうが！」って。

男1 強えな、女ってそういう時。

男2 ほんと。いい母ちゃんになるよあいつ。けど俺は何が出来んだろうな、
父親として。

男1 父親として？

男2 そう。まあ家の事俺がやるわけだから、掃除機は隅までかけるようにす
るよ。いつも丸くしかかけねえから。あとおむつは変えたい。風呂も入
れるだろ？

男1 うん。

男2 髪などでするだろ？ 靴の履き方教えるだろ？ あ、柔軟剤使うよ、
子供たちの服には。

男1 おー、いい親じゃん。

男2 だろ？ それからみっちゃんへの気遣いだって忘れないぜ。上の子だし、
俺の事まだパ…だし。けどなんたって父親だから俺。やること全部
やってやるつもりだよ。

男1 父親ねえ。で、どうすんの？ これから。

男2 これから？

男1 だから戸籍問題だよ。

男2 ああ。わかんねえこれ以上。もう疲れたわ。俺もう戸籍上は生きてない
事になっていいわ。

男1 悲しい事言うなよ。

男2 けどマジでもういいわ。子供さえいればマジで。一生懸命家事すつから
さ、主夫として養ってもらおうわ一生。

男1 けど先に死んだらどうすんだよ。

男2 え？

男1 彼女が先に。

男2 死ぬとか言うなよ。

男1 でもあり得るじゃん。ババアになってからかもしれねえけどさあ。

男2 ……子供いるじゃん。

男1 子供に養ってもらおうのお前。

男2 しょーがないじゃん。じゃあ俺も死ねってか？

男1 いやそうは言わねえけどさ。

男2 まあ死んでも死んだって証明も出来ないけどな。

男1 お前さあ、それってさあ、死んだら墓に入れないって事じゃね？

男2 え？

男1 そうならねえ？

男2 うそ。

男1 無縁仏になんだよお前。

男2 マジで？ うわーかつけー。無縁仏になんの俺？

男1 骨とか知らねえ奴と一堂に集められてさ。

男2 他人様とねんねかあ。ま、けど魂は別だから。

男1 わー魂ときますか。

男2 魂は自由になって、お前らと変わらなくなるからさ。それこそさ、ホヤ

だってチンパンジーだって、魂になりや優劣つけようがなくなるじゃん。

（あの世こそ平和の祭典状態だよきつと。

男1 魅力しかねえな。

男2 だろ？ これぞ自由っしょ。俺は魂だけになったら自由になれる。肉体

なんて早く脱いじやいたいよ。

男1 おお、脱いじやえ脱いじやえ。スッポンポンになっちゃえよ。

男2 よーし。（と脱ぎ始める）

男1 今じゃねえよバーカ。

男1 へへへ。ま、来世でまた会いましょうよ。

男2 だな。

男1と男2、グラスを合わせ乾杯する。

男1 で、名前決めた？

男2 子供の？

男1 うん。

男2 まだ決定はしてない。あいつき、生まれるまで男か女か知りたくないと言ってる。出生前診断とかも受けないとか言ってる。出生前診断って何？

男1 子供に病気とか障害とかあるとわかるんだってよ。

男1 へえ。

男2 けど受けないって。

男1 なんで？

男2 めんどくさいって。なる様になるっしょって。

男1 わー強えー。

男2 それに、どんな子でもいいからってき。家族なんだからってき。

男1 それ泣けるー。

男2 だろ？

男1 でも俺みたいなバカが生まれたらどうすんの？

男2 お前バカじゃねえし。

男1 いやけど数字とか読めねえし。

男2 読めないからってバカじゃないっしょ。

男1 そうなるか？

男2 俺泳げないぜ？

男1 だから？

男2 一緒だろ？

男1 一緒かあ？

男2 一緒だよ。ただちょっと不便さが桁外れに違うけどな。

男1 めっちゃ不便だよ。金払う時とか一人だとドキドキするもん。あと笑われねえかなーとか心配になるしな。

男2 笑わないっしょ。

男1 いや可愛い子ってき、俺が間違って金払うと、ウフツて笑うんだよ。

男2 いいじゃん。可愛いんだろ？

男1 まあな。けど俺もつられてウフツてなっちゃうのが癪に障る。

男2 つられてやんの。

男1 つられるっしょ普通、笑ってる奴に。

男2 けどウフツはないわお前。

男1 結構可愛いんだぜ俺のウフツ。

男2 見せて。

男1 (肩をすくめて)ウフツ。

男2 もう一回。

男1 ウフツ。

男2 ……。

男1 反応しろよ。

男2 ああごめんごめん。可愛くねえなと思ってき。わかってたけど。

男1 じゃあやらせんなよ。

男1、ズズーと音を立てジュースを飲み干す。

男2 お下品な。

男1 (もう一度ズズーと音を立てて飲む)

男2 やめろ。

男1 (やめない)

男2、紙ナプキンをフェイントをかけて投げる。男1、へへへと笑う。

男1 あー美味かった。次何しよっかな。

男2 コーヒー行っとけよコーヒー。

男1 ヤダね。俺はおこちゃまのままなもんで。お前と違って、親父のおこち

やまのまんまなもんで。

男2 あっそ。

男1 (ズズーとすすって) あーあ。お前が親になるってのに、俺何してん

だかって感じだよなあ。

男2 皿洗いだろ？

男1 それはわかってんだよ。てかそれしかねえんだよ。けどさ、親父がさ、

「それでもいいよ」とか言ってる。俺母ちゃんと一緒に地震で死んどきや良かったよ。

男2 何突然怖い事言いだしてんのお前。

男1 新生児室で保育器からポーンって投げ出されて、壁にドーンってぶつかってこれだよ？ バカ確定だよ？ いやあ、こんな俺一人だけ助かって

もなあ。

男2 親父いるじゃん。

男1 けど甘やかすしかできないからあの人は。俺、生きた心地がしないんだよ。俺がバカだつて事も、「それでもいいよ」だぜ？ それでもいいよってあれ何？ 困ってるんですけどこっちは。みたいな。生き辛いとか、その次元じゃないんですけどこっちは。みたいな。

男2 だよなあ。けどずいぶん弱気じゃん、急にどうした。

男1 別に急にじゃねえよ。いつも思ってたんだよ。……俺、お前らに置いてかれる気がしてさ。

男2 置いてかねえよ。心配すんなよ。

男1 けど俺、皿洗い以外の何者にもなれねえ気がすんだよ。ってかそうなんだよ。

男2 けど俺のダチじゃん。

男1 え？

男2 俺のダチ。何者でもなくねえよ。

男1 ……嬉しい事言ってくれるじゃん。

男2 お前定期的に自分を卑下すんの好きだよな。そういうのさ、NPOに搾取されるからやめとけよ。

男1 NPO悪くねえし。

男2 けどそろそろうざいだろ。

男1 けどバカには持ってこいなんだよ、バカにはさ。

男2 バカって言うなって。お前何言うんだよ。生まれてくるって尊いんだぜ？ 刷り込まれてんじゃねえよ。

男1 ハア。母ちゃんが今の俺見たらなんて言うだろうな。

男2 クソいじけてんじゃねえよ。とか？

男1 そんな口悪くねえわ。多分だけど。

男2 (考えて) 腹いっぱい炭酸飲めてよかったわね。

男1 言うかよそんな事。

男2 グラスはその都度変えなくてもいいんじゃない？

男1 ああ。それは言うかも。

男2 ストロウの袋は吹いて飛ばさない事。

男1 もう遅い。

男2 でも何があっても愛してますよ。

男1 絶対言わねえ。

男2 ハハハ。

男1 お前は言うの？ 子供に。愛してるって。

男2 物心つくまでは言おっかな。脳みそに刷り込んでおくんだよ。そしたらもう言わなくてもよくなるんじゃない？

男1 言いたくはないんだ。

男2 いやわかんねえよまだ。ただ恥ずかしくってさ。体中の毛がモサモサよだつっていかさ。

男1 みっちゃんにも言わねえの？
男2 いや言うよ。恥ずかしいからお眠の時にそっと耳元で言う。愛してるよ
って。
男1 刷り込んでんだ。
男2 そう。刷り込んでる。
男1 俺も多分向かねえんだろうな、そういうの。まともな奴がやること、全
部向かねえ。
男2 なに弱気になってんだよ。さつきから聞いててうざったくなるわ。
男1 でもお前も言ったじゃん。毛深い奴は弱いつて。
男2 言ったっけ俺？
男1 言ったじゃん前ここに来た時にさ。
男2 ああ、ここだな。けどそのセオリーお前に真っ向から否定されなかった
っけ。
男1 そうだっけ。
男2 で、勝ちの法則見つけろって俺言ったじゃん。
男1 マジで？
男2 言ったって。
男1 ああ。じゃあ取り消すよ。毛深い奴は弱い説。
男2 見つけようぜ、勝ちの法則。
男1 ー。あればな。
男2 作るんだよ。ないならさ。
男1 なんかそれかっこいいじゃん。時代の寵児って感じじゃん。
男2 何それ。
男1 よくわかんねえけど、その時代のかっこいい人、みたいな。
男2 ああ今時のな。俺たちのな。
男1 そうそう、そういう感じ。
男2 じゃあやっぱ俺らで作ろうぜ。勝ちの法則。じゃあ、俺からな。(と考え)
炭酸いっぱい飲む奴が勝つ。
男1 うん。
男2 ドリンクバーで三時間粘れる奴が勝つ。
男1 うん。
男2 震災で生き残った奴が勝つ。
男1 うん。
男2 お前は？ お前も言えよ。
男1 ー。そうだな。そこそこのルックスの奴が勝つ。

男2 ハハハ。それほど奴じゃねえかよ。ここにいる奴、ほとんどじゃねえかよ。見てみ。どいつもこいつもそこそこじゃねえかよ。
男1 ハハハ。じゃあ、みんな勝つな。
男2 うわ。意味ねえー。
男1 うわー、意味ねえことめっちゃ好き。
男2 ハハハ。
男1 ああ、なんか勇気わいてきたわ。よし、炭酸おかわりしてくる。
男2 おう。

暗転。

5場 ファーストフード店

テーブルの上にはポテトが一つ。女1、ペットボトルの水を飲んでいる。
男2、紙ナプキンでこよりを作り、鼻に突っ込んでくしゃみを待っている。

女1 やめとけ。鼻水まみれになる。
男2 (やめない)
男1 (女1に) ポテト食わないの？
女1 え？
男1 今日遠慮がちじゃん。
女1 ーなんか腹痛くてき。いいわ私。二人で食べてよ。
男1 珍しい。
男2 朝からずっと言ってるじゃん。ヘークション。
男1 きたねえな。向こう向いてやれよ。ポテトにかかんだろうが。
男2 塩味になっていいじゃん。
男1 鼻水塩味しねえよ。
男2 え、俺のはするよ？
男1 なら塩分過多なんだよ。
男2 あつそ。(とこよりを鼻に入れる)
男1 よくこんな男と付き合えるよな。しかも将来の約束？ そんなのよく出来るよな。
女1 あんただって友達やってんじゃん。

男1 そうだけどき。
女1 私はさ、鼻水ぐらいで動じる女じゃねえんだよ。ケツだって拭いてやる
つつうんだよ。
男2 おー俺愛されてるじゃん。ますます好きになるじゃん。
男1 わかんねえわお前ら。ますますわかんねえわ。
女1 私たちつてさ、なんかね、反対な感じがすんだよね。
男2 うん。
男1 反対？
女1 うん。私は捨てられっ子じゃん？
男1 うん。
女1 けどこいつは、捨てられなかった子じゃん？
男1 うん。
女1 なんかね、それがピタツとはまるっていうかさ。
男1 でもほとんどの子供が捨てられなかった子じゃね？ 世の中。俺だつて
そうだし。
女1 けどこいつはさ、
男2 ヘークション。
女1 捨てられてもおかしくなかった子じゃん。
男2 あのさ、さつきから子つつうのやめろよ。いい大人が。俺親になんだぜ？
男1 親になる奴がくしゃみで遊んでんじゃねえよ。
男2 いいじゃん。それは別だし。
女1 要はね、こいつの母親含めて愛しちゃったみたいな感じなんだよね。私
に足りないもの、埋めてくれるみたいでさ。
男1 ああー。
男2 けどうちの母ちゃん、捨てる気満々だったらしいよ？
男1 そうなの？
男2 生まれるまでは此畜生とか思ってたらしいけどさ、けど生まれてみたら
俺、母ちゃんと同じ鼻してるからさ、それで捨てられなかったんだつて
よ。
男1 じゃあ顔で決まったの？
男2 そうそう、そんな感じ。そんなもんなんじゃない？ 愛情つてさ。
男1 そんなもんかあ？
男2 お前だつてさ、彼女の事、顔で選んだんじゃねえのかよ。
女1 彼女と子供は違うっしょ。
男2 けど愛情は愛情じゃねえの？

女1 えー全然違うよ。私みっちゃんがどんな顔でも愛する自信あるし。あんたのお母さんもさ、照れ隠しで言ってるんじゃないの？

男2 けど嘘つく人じゃねえし母ちゃんは。

男1 けどほら、お前も言ってたじゃん。母ちゃんの話、ガセかもしれないって。

男2 ああ。

男1 その辺はさ、ガセ情報なんじゃねえの？

男2 いやいやガセだと困んだろうがよ。

男1 なんだだよ。

男2 だって愛されてる事までガセかもしれないくなるだろ。

女1 それはないっしょ。

男2 けどその可能性も出てくんだろ全部ガセならさ。だって俺、世界一憎い男の子供だぞ？

女1 うん……。

男2 顔で愛情湧いたって話を信じさせてくれよ。ガセだなんて言わないでくれよ。頼むからさ。ヘクシヨン。

女1 だからお前やめろってそれ。

男2 へへへ。

男2、女1のお腹に手を当てる。

男2 俺もこの子の顔見たら、湧いてくんだらうな、愛情ってやつがよ。

男1 まだ沸いてないの？

男2 いや愛情っぽいのはあるけどわかんねえんだよ、これが本物かどうかさ。人間、生まれてなんぼだしよお。

女1 わ、なんかちよっとムカついた。

男2 なんだだよ。

女1 生まれてみてどんな子かで愛情湧くとか無しでしょ。くそブツサイクかもしれないわけだしさ。

男2 え、くそブツサイクなの？ 俺の子。

女1 かもしれないじゃん。

男2 えーヤダよくそブツサイクはさあ。可愛い子がいいよ。ねー可愛く産んでよ。

女1 そのつもりだけどさ、でももし違ったら捨てる？

男2 え？

女1 捨てたりする？ ブサイクだったら。
男1 お前話極端だな。
女1 けどわかんないじゃん。色んな理由つけてき、男って子供捨てるじゃん。
男2 何急に不安ぶってんだよ。
女1 だってき、みっちゃんの父親だってき、
男2 ふざけんなよ。俺はそんな人間じゃねえわ。みくびんじゃねえよ俺の事。
女1 だってきあ……。
男1 まあまあまあ。
男2 ただよお、ただまだ、夢見てるみたいなんだよ。うれションしそうっつ
うか、ソワソワするっつうかさ。落ち着かねえだけなんだよ。
女1 ……。
男2 だからって捨てるわけねえだろうがバカ。
女1 ……ごめん。そうだよ。私ちよつとなんか調子悪いわ今日。
男2 名前だつてき、ちゃんと考えてんだぜ？ 待ってんだぜ俺。
女1 うん。ちゃんと決めないとね。
男2 うん。ちゃんと決めないと。つてか絶対いい名前つけてやっからよ。
女1 うん。
男1 ねえねえねえ、それ俺も入れてよ。
男2 はあ？
男1 俺も名前決めたい。
男2 なんてだよ。
男1 俺ゴッドファーザーになりたいんだよ。で、一目置かれてえんだよ子供
によ。
女1 ならねえよ。
男1 ねえいいじゃん。
女1 ダメ。私たちの子供だもん。
男1 ケチ。
女1 ケチとかそういう問題じゃないっしょ。
男1 けど俺もう考えてるんだよね。
女1 はあ？
男1 春奈ってどうかな。
男2 は？ 春奈？ お前の元カノの名前じゃねえかよ。ぜってえねえわ。
男1 でも可愛くない？
女1 キモいってマジで。なんか吐きそう……。 (と水を飲む)
男1 キモいって言うなよ。女に言われると結構へこむんだからさ。

男2 お前さあ、どんだけ引きずってんだよ彼女の事。
男1 だってさ、名前もう呼べないの悲しいじゃん。
男2 知らねえよ。
男1 この間もさ、ばったり会ったけどさ、名前も呼べなかったんだよ俺。
女1 会ったの？ 彼女と。
男1 うん。ドンキでばったり。ねえ、女の子がさ、シャンプー変える時って
どんな時？
女1 は？ シャンプー？
男1 そう、シャンプー。
男2 何訊いてんだよお前。
女1 飽きるからじゃね？ 合わないからとか。
男1 うーんでもお気に入りですと使ってたやつなんだ。
女1 だから飽きたんじゃね？
男2 ヘークション！
男1 だから飽きてなんかなかったんだよ。
女1 だから、もう飽きたんじゃね？
男1 でもずっと使ってた豪語してたぐらいなんだよね。
男2 ヘークション。
女1 豪語？ どういうシチュエーションでシャンプーについて豪語すんだよ。
男2 メーカーの回し者か、彼女。
男1 いや、そんなんじゃねえよ。
男2 わかっているよ。お前の元カノ、保険の外交員だったもんな。
男1 うん。かっこいいんだよな、あいつが働いてる姿。俺そういうところ好き
なのかも。いや、好きだわ、そういうところ。うん。
女1 で、シャンプーのくだり何なのよ。何が言いたいわけ？
男2 もったいぶんなよ。ザザッと話せよ。
男1 ああ。じゃあ。あのさ、この間ドンキでばったり会ったわけ。彼女と。
そしたらあいつ、前とずいぶん雰囲気違ってさ。シャンプーとかも
変わってて。
男2 え、匂いでわかんの？
男1 違うよ。籠の中に入ってたのを見たんだよ。俺そんなにキモくねえわ。
女1 え、で？ 彼女が変わったのが、新しい男が出来たんじゃないかと。
男1 そう。そんな気がしてさあ。
女1 ああ。
男2 いるな。いるいる新しい男。

男1 マジ？ やっぱそう思う？
女1 とも限らなくない？ ただの気分転換つつうか。振った方だって辛いって事あるよ？ だって七年続いてたわけだよねあんたたちって。そりゃ辛いっしょ、別れ話持ち出す方だってさ。
男1 そうなのかな。毅然としてたけどな。
女1 女が気毅然とする時は二つ。一つは何かを押し殺している時。そしてもう一つは、屁をこきたいのを我慢してる時。
男1 屁じゃねえよ。屁なんかこかねえよ彼女は。
女1 こくよ。
男1 こかねえよ。
男2 こくこく。
女1 こくに決まってんじゃん。彼女を美化しすぎなんだよ。
男1 けど違うよ。
女1 あっそ。だったら押し殺してたんだね、屁以外の何かをさ。で、なんて声かけたの？
男1 あ、何も。
女1 何も？ 何も言わず籠覗いてただけ？
男1 ああ、まあ。
女1 それってさ、家の近くのドンキ？
男1 ああ、いつも行くところ。
女1 ああ。じゃああれだ。ほんとは待ってたんだよ声かけられるの。
男1 え？
男2 うん、俺もそう思う。でなきゃわざわざお前の行きつけのドンキでシャンプー買うかよ。
男1 え。でもなんで？ 向こうから振ったんだよ？
女1 わかってねえなあお前。そもそも止めてほしくて言ったんだろ？
男1 止めるって何を？
女1 だから、別れ話を。
男1 俺嫌だつて言ったつて。
男2 でも結婚しようとは言わなかったんだろ。
男1 え、結婚？
女1 そう、結婚。
男1 それはさ……なんていうか、早いつていうか。
女1 けどいい感じだったじゃん。時は満ちたって感じ。
男2 誰が見てもって感じ。

女1 うんうん。

男1 けど彼女、そんなそぶり見せなかったし。

男2 気付かなかったただけだろ。お前バカだから。

男1 バカって言うなよ。

男2 バカだろ。バカ以外の何者でもないだろ。七年も待たせてさあ。

男1 ……。

女1 別れ話の時とドンキ、二回もチャンス逃がしちゃったんだよ、あなたはさ。

男1 マジか……。けどお前だってさ、結婚なんて儀式つまんねえみたいな事言うじゃん。

男2 そんなの詭弁に決まってるだろうがバカ。俺と違ってよ、お前は出来んだからよ、逃げんじゃねえよ。

男1 ……。

男1、ポテトをつまむ。

男1 俺だって、頭が良ければ、一緒になりたいんだよ……。

男2 ……。

女1 ……。

男1、ポテトをつまむ。

男1 給料も、たくさんもらえれば、一緒になりたいけど……。

男1、ポテトをつまむ。

男1 正社員とか、保険とか、年金とか、よくわかんないし……。

男1、ポテトをつまむ。

男1 あ、これ、俺一人で食っちゃってる。

女1 いいいい。いいよ別に。

男1、ポテトをつまむ。

男1 なんて色々わからないかな俺。バカって楽だと思われてるけどさ、生きていけねえのにさ、何が楽なんだか、俺全然わかんねえよ。
女1 ほんとだよね。

男1、手についたポテトの塩をパンパンと払い、

男1 あーほんとのはさ、今日、お前らを呼び出したのはさ、ポテトを食いたかったからでき。

男2 は？

男1 食いたくなつたから呼んだ。一人で食うの淋しくて、彼女の悪口でも言いながらと思つたんだよ。しょっぱいの最高じゃん。悪口と合うじゃん。それで吹っ切れるじゃん。そう思つてさ。別にシャンプーとかどうでも良くてさ。いやどうでも良くはないんだけどさ。シャンプー変える奴なんかと別れちゃえよとかさ、そういうの期待したりしてさ、けどなんかさ、どの彼女が俺が見る最後の彼女なのかとか考えちゃったりしてさ、もう一回もう一回って思っちゃつてさ、だからなんつか、なんつかこう……あー、もうわかんねえや俺。ごめんマジで。わけわかんねえ事言つて。

男2 謝んなよ。そういう時もあんだろ。

女1 そうだよ。会いたいと食いたいには理由はいらねえんだよ。

男1 そうなの？

男2 会えるか食えるかはわかんねえけどな。

男1 ああ……。

男2 けどいつでも付き合うって、ポテトぐらい。あ、お小遣いがあればの話だけだな。

女1 ポテト代ぐらい出してやるよ。そんなかわり、割り勘にしろよな絶対に。

男1 わかつてるよ。

男2 ヘクシヨン。

男1 あー、ありがてえなお前ら。めっちゃ嬉しいわ俺。ピアノ弾きたい気分だわ。

男2 え、お前ピアノ弾けんの？

男1 いや、弾いた事ないけど。へへへ。(とポテトをつまむ)

女1 ヤバいなこいつ。

男1 あー今のポテトしょっぱかったあ。底の小っちゃいやつめっちゃしょっぱい。

男2 マジで？

男2、ポテトをつまむ。

男2 ほんとしょっぱー。

女1 塩たまってるんじゃない？

女1、下腹をさする。

男1 けどうめえ。

男2 うん。うめえ。

女1 あー腹痛えー。

男1 ああ、新しいシャンプーの匂い、嗅ぎたかったなあ。

男2 もう自分で買えよ。買って使ってお前が変われよ。

男1 ああ、そうだよなあ。けどなあ。嗅ぎたかったなあ。

女1 まだ言ってるよ。

男2 救いようがないやつ。

男1 ああ、ポテト、ほんとしょっぱーわ。ハハハ。

女1 痛い。あーマジで腹痛いわ……。痛い……。

女1、腹を抱える。

男2 おい、大丈夫かよ。

暗転。

六場 病院の廊下

男2 にスポットが当たる。

男2 あ、はい、父親ですけど。あ、いや違いますけど。え、でも父親なんで

俺。いや父親なんすよ俺。いや待ってください、待ってくださいって、

俺父親なんですって。ねえ、俺父親なんですって！ あ、みっちゃん待

って。ねえみっちゃん、みっちゃん、みっちゃん！

男2、呆然と立ち尽くす。
静かに暗転。

七場 牛丼屋

男1、男2、牛丼を食べようとしている。丼には山盛りの紅シヨウガが乗っている。

男1 まだまだだな。うん。まだまだ米膨らむな。

男2 いいの？ おごつてもらっちゃって。

男1 なに、並盛じゃないの。

男2 そうだけどき。悪いななんか。

男1 しょうがねえじゃん。俺一人で店入んの苦手だし、お前小遣い忘れられてるんだろ？

男2 うん。あいつ完全に俺の小遣いの事忘れてんだよなあ……。ってか俺の事も忘れてんだよなあ……。

男1 まあ、そういう時もあるっしょ。

男1、さらに紅しょうがを二人のどんぶりに積んでいく。

男1 赤富士って知ってる？

男2 赤富士？

男1 富士山が赤くなるんだってよ。

男2 どういうあれ？

男1 知らねえけど。朝日か夕陽なんじゃね？

男2 ああ。

間。

男1 じゃあ白富士は？ あんのかな。

男2 白はいつもだろ。頭んとこ真っ白じゃん。

男1 あ、そっか。

間。

男1 じゃあ青富士は？

男2 知らね。

間。

男1 黒富士。

男2 あるんじゃないね？ 誰だって暗い顔の時あんじやん。

男1 山だぞ。

男2 山だって生きてんだからさ。

男1 ああまあそうだけど。

男2 っつかなんてさつきから富士山の話してんだよ。

男1 これ富士山に似てねえ？

男2 牛丼が？ 小っちええ富士山だな。お前の中ではこんなもんなの富士さんって。

男1 っつか見た事ないんだよね、俺。

男2 マジか。

男1 ないよ。あんの？

男2 そりゃあるよ。

男1 何きっかけで見えるわけ、富士山って。

男2 何きっかけて、でっけえもの見たいきっかけだろ。日本一だぞ富士山って。

男1 え、そうなの？

男2 なんで知らねえんだよそんな事もよお。

男1 やっぱ生で見るとさ、美味しそうなんだろうな、富士山って。

男2 は？

男1 だって特盛よりもでかいんだろ？ 富士山。

男2 どこと比べてんだよ。

男1 だから特盛と富士山。紅しようがも勿論激乗せで。けど富士山ってさ、

男2 富士山富士山うるせえんだよさつきからよお！

男1 ……。

男2 あ。…ごめん…俺…。

男1 うん。わかってる。

間。

男2 ごめんな。……食わしてやりたかったなと思ったりして。

男1 ……。

男2、ティッシュを取り出し鼻をかむ。

男1 今日は泣かねえって言ったじゃん。美味しい物食いまくってやるって言ったじゃん。俺がおごってやるしさ。

男2 ごめんごめん。けど無理みたいだわ。だって俺、親になる気満々だったからさ。ってかもう親になってるつもりだったからさ。すげえそれが気持ちよくってさ……。

男1 そう。

男2 ……まだちっこくってよ、けどでっかくってよ。名前もまだ付けてやってなかったんだぜ？ なのにもういないなんてさ……。

男1 うん。

男2 やっぱ人って戸籍じゃねえわ。触れられるかどうかだわ。ここにいないってすげえ悲しいみたいだわ。

男1 うん。

男2 みっちゃんさがさ、すげえ気を遣って俺の事パパって呼びでした。

男1 そうなの？

男2 朝パパって起こしに来るんだよ。毎日おはようが辛えわ。

男1 ……。

男2 名前決められなかったからかなあ。もたもたしてたからなのかなあ。

男1 そんなんじゃないよ。

男2 口悪いからかな。稼ぎがないからかな。俺が父親なのが気に食わなかったのかな。

男1 そんなんじゃないって。

男2 なんでわかるんだよ！ 俺らってさ、子供からすれば絶望的な大人じゃん。俺は働いてねえし、お前は永遠にパイトだろうし、どっちもこの先低空飛行するしかねえわけだし。いや、飛べない飛行機状態だろうし。そりゃ子供は目をそむけたくなるわ。親ガチャ失敗だわ。別の親の元に生まれたくなるわ。けどせめて戸籍上も俺の子として死んでほしかったわ！

男1 ……。

男2 いや、逆かあ。俺の子供じゃなくてもいいからさ、生きててほしかったわ……。

男1 ……。

男2 情けねえ。マジで情けねえわ。

男1 ……。

男2 やつと俺、俺が生まれてきた意味わかってきたんだぜ？ 特許取った気分だったんだぜ？ なのによお、こんなのありかよ……。

男1 (考えて)わかるよ、気持ち。

男2 ……わかんねえよ。お前に俺の気持ちなんてわかるわけないじゃねえかよ。

男1 けどさ、こういう時はわかるよって言うのが親友ってもんじゃねえの？

男2 逆だろ普通。

男1 そうなの？ え、わからないよって言うの？

男2 知らねえよ。自分で考えろよバカ。

少しの間。

男2 ……バカじゃねえけどよ。

男1 おせえわターコ。

男2 ……。

男1 彼女は どうしてんの？ 大丈夫なの？

男2 もう仕事行ってる。壁に穴四つ開けたけどね。あと皿二枚割ったけどね。

あとフォークとナイフ念力で曲げたけどね。

男1 何それ。

男2 カレーライス食いながら「ウーッ」って言ったら曲がった。でサラダ食べながら「イーッ」って言ったらまた曲がった。

男1 わあ怖えー。

男2 あの調子なら、そのうち俺もひん曲げられそうだわ。

男1 ひん曲がったら見せるよな。YouTubeに動画上げてやつからさ。

男2 いいね付くかな。

男1 付く付く。十二個ぐらい付く。

男2 少ね。けど頼むわな、そんな時はよ。

男1 うん。任せてよ。

男2 ……あいつさ、ぼつりと言ったんだよね。「私には子供しかいないのに」ってさ。あれ、俺家族として認められてねえじゃんって思ってたさ、ぼー

つとしちゃったよ。

間。

と突然男2、机をたたきながら、

男2 くそっ、くそっ、くそっ！ 俺は客じゃねえわ。俺も家族だわ！ くそっ、くそっ……。(とうつむく)

男1 (周りに) 何だよ！ 見てんじゃねえよ！ 見せもんじゃねえんだよ！
男2 戸籍欲しいわ。ケツから手が出るほど戸籍欲しいわ。せっかく生まれてきたんだからよ。俺だってせっかく生まれてきたんだからよ。震災の中授かった命なんだからよお。

男1 そうだよな。欲しいよな。

男2 それに、それに、一緒の墓に入りてえよ俺だってよお。……ハア。けどこうやって愚痴ってるだけでよ、なんも出来やしねえ。どっか片隅で生きてくしかねえんだわ、どうにか腹膨らませてさあ。ああ、お前の言う通り、全部地震のせいにしてやりてえわ。なんもかも全部、地震のせいにしてやりてえわ。

男1 ……。

男2 けどこんなんだからよ、多分俺ひん曲げられるんだろうな。

男1 そんなんじゃねえよ。てかひん曲げられねえって。大丈夫だって。

男2 そうかな……。ってかひん曲げるって何？

男1 知らねえよ。お前が言い出したんだろ。

男2 なんだよひん曲げるって。(身をよじって) こんなんののかな？

男1 おい、ひっくり返すぞ牛丼。

男2 おー危ね危ね。大事な牛丼並盛が。

男2、大事そうに牛丼のどんぶりに両手を当てる。

男2 あーこれあったけーな。俺が初めてNPO行った時お前がいれてくれたお茶ぐらいあったけーわ。

男1 お茶？

男2 入れてくれたろ？ お前が。きったねえ手で。

男1 きったねえは余分だわ。

男2 ハハハ。

男1 え、けどそれで飲まずに飛び出していったのか？ お前の入れたお茶な

んて飲めるかよ、みたいな。

男2 えあつたかくてよ。本当はあの時俺、ありがとうって言いたかったんだぜ？

男1 じゃあなんで出て行ったんだよ。

男2 なんかよ、全部溶けちゃう気がしてき。溶かされちゃうっていうかなんつか。俺丸くなっちゃうような気がしてき。あ、それ俺じゃねえわって思ったんだわ。

男1 そっか。

男2 けどあの後、俺を追っかけてきたお前らと一緒にファミレスで飲んだコーラ、あれがすげえ美味くてよお、すっぽりお前らにはまっちゃまったんだよな。

男1 お前あん時めっちゃデカイゲップしたよな。

男2 したした。

男1 第一声がゲップってあり得ないだろ。

男2 けどめっちゃ美味くてき、言葉よりも先にゲップが出ちゃったんだわ。爆笑されたけど俺、めっちゃ気持ち良かったんだわ。

男1 あっそ。痛い奴って思ってたけどね、俺は。

男2 お前ほどじゃねーだろ。

男1 なんでだよ。別に俺は痛かねーだろ。

男2 いやいや、鞆にゲップする奴に言われたくねーわ。

男1 それはマナーだよマナー。

男2 言ってる。

男1 ハハハ。

男2 それによ、お前まだ彼女のケツ追っかけてんだろ。マジで痛いぞそれは。

男1 ……追っかけてねえし。

男2 追っかけてるじゃねえかよ。

男1 追っかけてねえよ。

男2 嘘つけ。この間も彼女んちの周りうろついてただろ。

男1 え、なんで知ってるの？

男2 彼女から連絡があつたんだよ。やめさせてほしいってき。

男1 マジかあ。

男2 洗い場の子にしとけて。横顔似てるんだろ？

男1 それが聞いてよ。この間気付いたんだけどき、正面からよく見るとマーモセットみたいな顔なんだよなあ。

男2 何だよそれ。

男1 わ、知らねえのお前。耳毛出てるみたいな猿。

男2 知らねえよ。

男1 とにかく猿だよ猿。猿に似てんの正面は。

男2 わー猿かあ。ないな。猿はないな。

男1 だろ？ やっぱ人と猿は違うって。全然近くねえって。あーやっぱ彼女
じゃなきゃダメみたいだわ俺。

男2 諦めたんじゃないかったのかよ。

男1 まだね、心が残ってたんだよ、俺はさ。……俺はまだ、彼女が好き。

男2 そっか。だったらさ。だったらよお。

男1 うん……。

間。

男2 ああ……。それにしても、いい夢だったわ。

男1 うん……。

間。

男2 あーヤバイ。

男1 何？

男2 俺腹減ってるわ。こんな時でも俺腹減っちゃってるわ。

男1 おー、人間っぽいじゃん。

男2 マジかあ。いいのかわ、こんな時に腹減ってるさ。

男1 いいんじゃないの？ 人間食ってなんぼって、お前が言ったんじゃない。

男2 そうだったっけ。

男1 食わなきゃテロだぜこの紅ショウガ。

男2 だよな。(息を大きく吸い) ちくしょう。食うしかねえか。

男1 食うしかねえよ。

男2 だな。

男2、手を合わせる。

男1、それを見て手を合わせる。

男1 なあ。食い終わったらファミレス行かねえ？ 炭酸飲まねえ？

男2 いいねえ。腹ちぎれそうだけど。

男1 ハハハ。行こうぜ行こうぜ。

男2 いいよ。わかった。じゃあ、いただきます。

男1 いただきます。

男1、男2、牛丼を紅シヨウガごと掻きこむ。

男2、フフフと笑い始める。

男1 なんだよ気持ちわりいな。

男2 ハハハ……。ああー。やっぱうめえわ紅シヨウガ！

男1、男2、笑う。

暗転。

了